



平安を願った奥州藤原氏の祖

藤原清衡

今から約八〇〇年前の武將で、奥州平泉藤原氏の初代。平泉に大きな政治文化都市を建設し、中尊寺や「金色堂」（国宝建造物）を建てると、仏教の浄土思想を取り入れて、人々の平和と国家の安泰を図った人である。

一〇五六年（天喜四年）、都から下って陸奥国亘理郡（現・宮城県亘理郡）の豪族となっていた藤原経清の子として生まれた。母は地元の豪族安倍氏の出身であった。

清衡が七歳のとき、父の経清は、前九年の合戦で源頼義と争って敗れ、安倍氏と共に処刑された。経清の実の子である清衡も、敗戦の常識として処刑をまぬがれないところであったが、母が、敵の武將であった清原武貞と再婚することとなり、清衡も清原家の一族となった。

その後、清原氏の内部争いが激しくなった。一〇八三年（永保三年）、この内部争いに陸奥の国の長官・源義家が武力介入をし、後

三年の合戦が起こった。このとき清衡二十八歳。この合戦の後半には、清衡は義家側についたことから家衡（父が違う弟）に命をねらわれ、清衡の妻と子が殺された。再び肉親との悲惨な別れを経験したのである。

この合戦は、一〇八七年（寛治元年）、義家と清衡の勝利で終わったが、この合戦の結果、清原一族で生き残ったのは清衡ただ一人となった。清衡は、陸奥の豪族安倍氏と、出羽仙北（雄物川中流地域）の豪族清原氏の両方とつながりのあるただ一人の人物として、広く奥羽地方を治めることになった。

こうして、度重なる争いに生き残った清衡は、その後、父経清の姓である「藤原」に姓をもどし、奥州藤原氏の初代となった。

清衡は、初めの頃は本拠地を江刺郡豊田館（現・江刺区岩谷堂）としていたらしい。勢力を拡大し安定を図るために、奥州で古くから有名だった柴田郡の高山神社と刈田郡刈田嶺神社が納めなければならぬ税を、二つの神社に代わって清衡が納めている。このことは結果として、清衡の名声を陸奥国に広め、支配していくために必要な権威を高めることになった。この他に、京都の関白藤原氏などに馬や砂金を贈って親しく交わりを深めた。当時、馬を贈ることは、主従関係（主人と家来の関係）を結ぶという意味がこめられ

ており、こうした親交によって中央政権から奥州の支配を認められることになった。そして東北地方で起きた反乱を鎮圧する役人である押領使に任命され、いよいよ奥羽の統治者としての地位を確立していくことになる。

一〇九四年（嘉保元年）頃には磐井郡平泉を中心に移し、中心都市の建設を開始した。仏教に従って、中尊寺を中心とする街づくりを推進した。こうして、平泉

にはこの時代の日本ほかには例を見ない壮大な都市が出現し、都と異なった特色を持つ奥州藤原氏四代約百年にわたる平和な時代が始まった。

清衡は、白河関（現・福島県白河市）から外が浜（現・青森市の陸奥湾岸）にいたるまままでの道に沿って、一町（約一〇九メートル）ごとに金色の阿弥陀像を描いた笠卒塔婆を立てさせた。また、白河関



中尊寺より北上川をのぞむ

から外が浜にいたる道のりの中央である平泉の山頂に一基の塔を建立し、陸奥の中央とした。

一一〇七年（嘉承二年）、清衡五十二歳のとき、大長寿院（二階大堂）を建立する。のちに、これを見た源頼朝は、これをまねて永福寺を鎌倉に建立している。

六十歳代になった清衡は、その妻とともに中尊寺金銀字交書経の写経（国宝指定）を行わせ、六十九歳になった一一二四年（天治元年）には、これも夫妻で「金色堂」の建築を始めた。およそ二年をかけて完成した「金色堂」は、柱、壁、床、内装、軒にいたるまで金銀螺鈿を散りばめたまばゆいばかりの豪華なつくりで



金色堂が納められている新覆堂（中尊寺）

あった。一一二六年（大治元年）三月に盛大に行われた「金色堂」の落慶供養（完成を祝い、供養する儀式）の際の清衡が捧げた文章の写本が残っているが、それによれば、「中尊寺は前九年・後三年の合戦の戦没者（敵味方の両方、人間以外の動物や鳥類など）を含め、不本意なまま死んでいったあらゆる霊を浄土へ導き、奥州全体を平安な国土にしたいとの願いから建立されたものであった。豪華なそのつくりには、こうした深く、切実な願いが強くこめられているのである。

落慶供養が行われた翌々年の一一二八年（大治三年）、清衡は當時としては高齢の七十三歳で生涯を終えた。その様子を『吾妻鏡』は、こう記している。「一病もなくして合掌し（手を合わせて）仏号（経）を唱え眠るがごとく」と。これが、世の平安を願った清衡の最期の姿であるが、その遺体（ミイラ）は、金色堂に永く安置されることとなる。

*参考文献

『岩手の先人 一〇〇人』

岩手日報社



豊田館から